



第63回 日本神経学会学術大会

2022年 5月18日(水) ▶ 21日(土)

大会長：服部信孝 天使大学大学院医学研究科神経学 教授 会場：東京国際フォーラム

Perspective of Neurology in a centenarian society

幸福100年社会における脳神経内科の展望

～AI技術との共存に向けて～

講演情報

一般演題口演セッション

[O-35] 一般演題口演セッション35

2022年5月20日(金) 09:45 ~ 11:15 第13会場 (東京国際フォーラム ガラス棟 5F G502)

座長:伊藤 康男(埼玉医科大学脳神経内科)

[O-35-6] 主幹動脈閉塞を伴う脳梗塞後のアピキサバン通常用量と比較した低用量の有効性と安全性

°村上 泰隆¹, 藤堂 謙一¹, 権 泰史¹, 岡崎 周平¹, 佐々木 勉¹, 内田 和孝², 吉村 紳一², 森本 剛³, 望月 秀樹¹

(1.大阪大学大学院医学系研究科 神経内科学, 2.兵庫医科大学病院 脳神経外科, 3.兵庫医科大学病院 臨床疫学)

【目的】アピキサバンの非弁膜症性心房細動(NVAF)患者に対する脳卒中、全身塞栓症の発症抑制及び大出血リスク低減効果が示されているが、主幹動脈閉塞例での二次予防については十分なデータがない。主幹動脈閉塞を伴う脳梗塞後のアピキサバン低用量の有効性と安全性を検証した。【方法】国内38施設で実施した観察研究(ALVO)のデータ用いて解析を行った。対象は20歳以上でNVAFを有し、主幹動脈閉塞を認め、発症14日以内にアピキサバンを開始した例とした。年齢、性別、高血圧症、糖尿病、心不全既往、脳梗塞既往の有無で調整し、1年以内の虚血イベント(虚血性脳卒中、全身塞栓症、急性冠症候群)、出血イベント(ISTH大出血基準を満たす出血)、全死亡の発生率を比較した。【結果】対象は641例(年齢77.4±9.8、男性52.1%)、アピキサバン10mg/日の通常用量(SD)群334例(52.1%)と、5mg/日の低用量(LD)群307例(47.9%)の2群で比較を行った。SD群はLD群に比し、年齢が若く(71.5±8.5歳 vs 83.5±6.7歳, p<0.0001)、女性が少なく(30.8% vs 66.4%, p<0.0001)、tPA投与率が高く(47.3% vs 34.5%, p=0.001)、血管内治療実施率が高く(60.2% vs 51.1%, p=0.026)、発症前mRS 0-1が多かった(91.3% vs 68.1%, p<0.0001)。SD群とLD群の虚血イベントは3.07 vs 6.21/100人年(HR 0.56, 95%CI 0.19-1.62, p=0.284)、出血イベントは8.48 vs 9.03/100人年(HR 0.67, 95%CI 0.32-1.44, p=0.31)、全死亡は2.9 vs 14.2/100人年(HR 0.41, 95%CI 0.17-1.02, p=0.056)であった。【結論】主幹動脈閉塞を伴う脳梗塞後において、アピキサバン通常用量例と低用量例との間で1年以内の虚血イベント、出血イベント、全死亡の差は無かった。